

「隣人を喜ばせる」

(ローマ15・1～6)

一、「力のある者たち」

1節を()覧ください。〈私たちが力のあ
る者たちは、力のない人たちの弱さを
担うべきであり、自分を喜ばせるべき
ではありません。〉とあります。このこ
とばから分かりますように、パウロは
自分のことを〈力のある者〉と語りまし
た。また、キリストを信じる信仰のゆえ
に「野菜しか食べない」「ある日を別の
日よりも大事だ」と考えない、こだわり
を持たない人も含めて、〈私たちが力のあ
る者たちは〉と語っています。同時にパ
ウロは、こだわりを持たない信仰者が
そのまま「力のある者」という考えは持
っていませんでした。なぜなら神の力
は人の弱さの内に完全に現れると、語
っているからです(IIコリント12・7
～9)。さらに〈自分を喜ばせるべきで
はありません〉と語っています。これは
2節の〈隣人を喜ばせるべきです〉と同
じ意味です。キリストを信じると「そこ
までやらなければならぬのか」と、周
囲から思われるかもしれません。が、結
果としてそのような生き方になります。
御霊が導くからです。

では、続く2節を見てまいります。

〈私たちが一人ひとり、霊的な成長のた

め、益となることを図って隣人を喜ば
せるべきです。〉とあります。元のテキ
ストどおりの語順で並べますと、〈私た
ちは一人ひとり、隣人を喜ばせるべき
です。霊的な成長のため、益となること
を図って〉となります。そういうわけで
1節、2節の流れは、〈私たちが力のある
者たちは、力のない人たちの弱さを担
うべきであり、自分を喜ばせるべきで
はありません。私たちが一人ひとり、隣
人を喜ばせるべきです。〉となります。
禁欲的な、ストイックなイメージを思
い浮かべてしまうかも知れませんが、
パウロは「それが、私たちが力のある者た
ちの姿である」と語っています。

そういうわけで、神の恵みによって
「力のある者」とされた人たちは、人間
的に考えるならたいへんです。ですが、
心配する必要はありません。御霊に導
かれる結果、そうなるからです。主のみ
こころを行うことは、重荷とはなりま
せん。むしろ喜びです。

二、「キリストも()自分を」

3節を見てまいります。〈キリストも
ご自分を喜ばせることはなさいませ
んでした。むしろ、「あなたを嘲る者たち
の嘲りが、わたしに降りかかった」と書
いてあるとおりです。〉と語りました。

〈私たちが一人ひとり、隣人を喜ばせ
るべきです〉の模範はキリストである、
とパウロは語っています。そして詩篇

69篇を引用しています。キリストは「力
のある者」で、力のない人たちの弱さを
担い、自分を喜ばせることをなさらな
い模範を示した、と読むことができます。
模範ですから、当然私たちもそのよ
うに生きるように定められています。

いつ定められたのでしょうか。聖書、す
なわち旧約聖書によってです。そうい
うつながりで、4節が語られています。
〈かつて書かれたものはすべて、私た
ちを教えるために書かれました。それ
は、聖書が与える忍耐と励ましによっ
て、私たちが希望を持ち続けるため
です。〉と。元のテキストは、〈すべて〉か
ら始まります。ですから、〈すべて〉が
強調点なのであります。〈かつて書
かれたもの〉は一つの単語でして、「こ
れまでに書かれた事柄」「昔書かれたも
の」「前の時代に書かれたこと」などと
訳されています。要は、旧約聖書です。

旧約聖書に書かれていることのすべて
は、私たちがキリストを信じている者を
教えるために書かれたというのです。
そういう気持ちで、旧約聖書を読んで
いるでしょうか。旧約聖書を読むとい
いまして、もちろんキリストが成し
遂げられた贖いのわざのゆえに、やら
なくてかまわないこともたくさんあり
ます。例えば、罪の赦しを得るために、
動物の犠牲を献げることです。私たち
に気がつかないことがまだまだたくさ
んあります。

三、パウロの祈り

5節、6節は、パウロの祈りです。パ
ウロの祈りは、祝福も含めて、手紙の中
にとどこどこに現れます。私は、それ
こそが祈りの理想形だと思えます。

5節に〈キリスト・イエスにふさわし
く〉とありますが、()は翻訳がむずか
しい箇所かと思われれます。新改訳は、旧
版も2017も〈キリスト・イエスにふ
さわしく〉ですが、新共同訳を始め、多
くの訳は〈キリスト・イエスに倣って〉
としています。どの訳が適当なのか、私
には分からないのですが、〈キリスト・
イエスに倣って〉と読んだほうが、キリ
ストもご自分を喜ばせることをなさ
らなかつたので、われわれも御霊に導か
れてそのように歩みたいという願いが
湧いて来るように、自分自身の思いが
導かれますので、私は好きです。

6節を見てまいります。〈そして、
あなたがたが心を一つにし、声を合わ
せて、私たちの主イエス・キリストの父
である神をほめたたえますように。〉と
あります。この中に〈声を合わせて〉と
ありますが、元のテキストは「一つの口
で」です。主イエス・キリストが父と呼
ばれた神をほめたたえる際、一つの心
で、一つの口でほめたたえるのが、神の
御意思であると知ります。ゆえに礼拝
は大切であり、使徒信条は大切です。